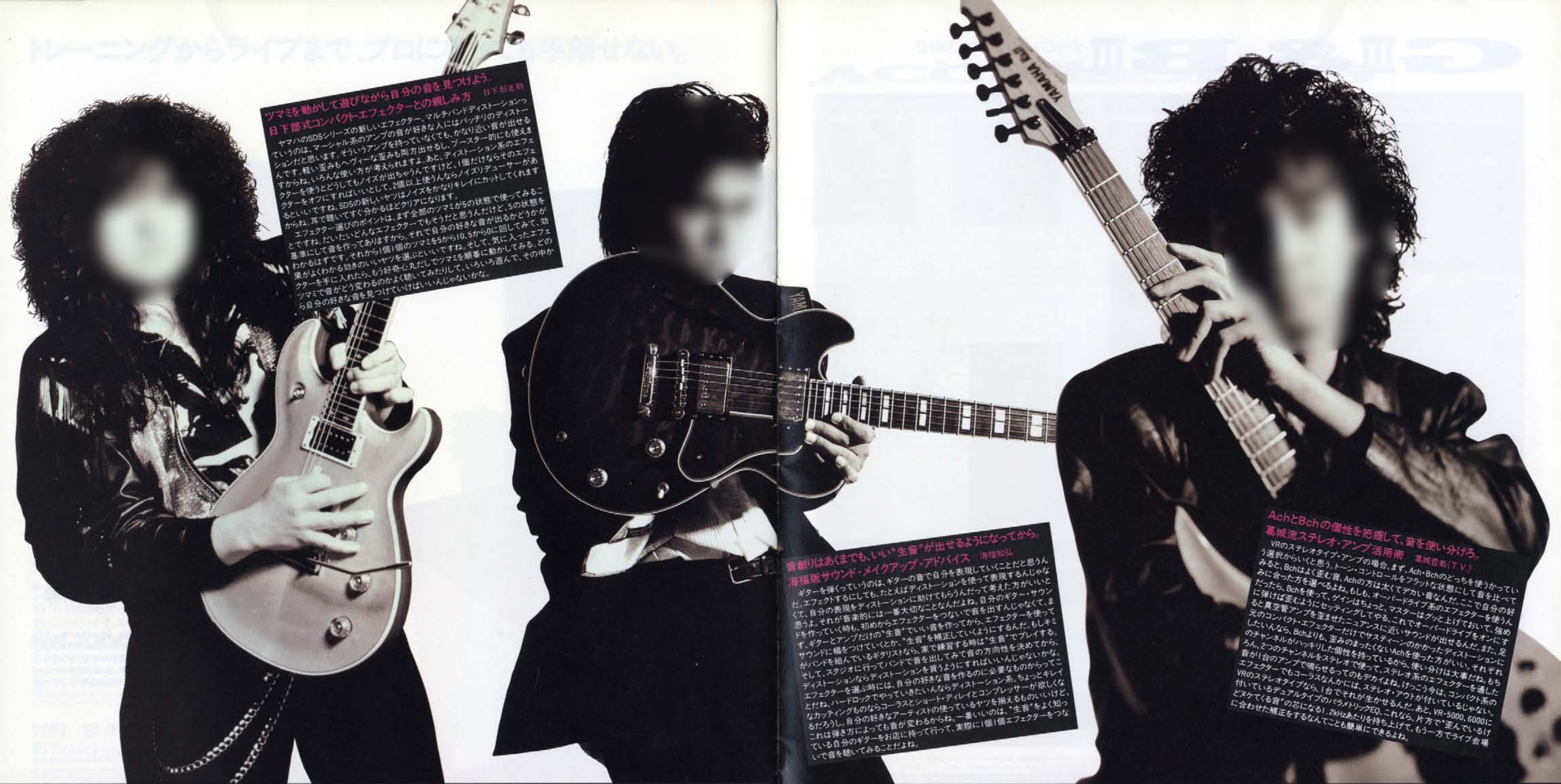


ツマミを動かして遊びながら自分の音を見つけよう。日下部式コンパクト・エフェクターとの親しみ方

日下部正則

ヤマハのSDSシリーズの新しいエフェクター、マルチバンドディストーションっていうのは、マーシャル系のアンプの音が好きな人にはバッチリのディストーションだと思います。そういうアンプを持っていなくても、かなり近い音が出せるんです。軽い歪みもヘヴィーな歪みも両方出せるし、ブースター的にも使えますからね。いろんな使い方が考えられますよ。あと、ディストーション系のエフェクターを使うとどうしてもノイズが出ちゃうんですけど、1個だけならそのエフェクターをオフにすればいいとして、2個以上使うんならノイズリデューサーがあるといいですね。SDSの新しいヤツはノイズをかなりキレイにカットしてくれますからね。耳で聴いてすぐ分かるほどクリアになります。

エフェクター選びのポイントは、まず全部のツマミが5の状態で使ってみることですね。だいたいどんなエフェクターでもそうだと思うんだけど、5の状態を基準にして音を作ってありますから。それで自分の好きな音が出るかどうかがわかるはずです。それから1個1個のツマミを5から10、5から0に回してみて、効果がよくわかる効きのいいヤツを選ぶといいですね。そして、気に入ったエフェクターを手に入れたら、もう好奇心丸だしでツマミを順番に動かしてみる。どのツマミで音がどう変わるのかよく聴いてみたりして、いろいろ遊んで、その中から自分の好きな音を見つけていけばいいんじゃないかな。

音創りはあくまでも、いい"生音"が出せるようになってから。海福版サウンド・メイクアップ・アドバイス

海福知弘

ギターを弾くっていうのは、ギターの音で自分を表現していくことだと思うんだ。エフェクトするにしても、たとえばディストーションを使って表現するんじゃなくて、自分の表現をディストーションに助けてもらうんだって考えた方がいいと思うよ。それが音楽的には一番大切なことなんだよね。自分のギター・サウンドを作っていく時も、初めからエフェクターをつないで音を出すんじゃなくて、まず、ギターとアンプだけの"生音"でいい音を作ってから、エフェクターを使ってサウンドに幅をつけていくとか、"生音"を補正していくようにするんだ。もしキミがバンドを組んでいるギタリストなら、家で練習する時は"生音"でプレイする。そして、スタジオに行ってバンドで音を出してみて音の方向性を決めてから、ディストーションならディストーションを買うようにすればいいんじゃないかな。エフェクターを選ぶ時には、自分の好きな音を作るのに必要なものからってことだね。ハードロックでやっていきたいんならディストーション系、ちょっとキレイなカッティングものならコーラスとショート・ディレイとコンプレッサーが欲しくなるだろうし。自分の好きなアーティストの使っているヤツを揃えるものいいけど、これは弾き方によっても音が変わるからね。一番いいのは、"生音"をよく知っている自分のギターをお店に持って行って、実際に1個1個エフェクターをつないで音を聴いてみることだよね。

AchとBchの個性を把握して、音を使い分けろ。葛城流ステレオ・アンプ活用術

葛城哲哉(T.V.)

VRのステレオタイプ・アンプの場合、まず、Ach・Bchのどっちを使うかっていう選択からいくと思う。トーン・コントロールをフラットな状態にして音を比べてみると、Bchはよく歪む音、Achの方は太くてデカい音なんだ。ここで自分の好みに合った方を選べるよね。もしも、オーバードライブ系のエフェクターを使うんだったら、Bchを使って、ゲインはちょっと、マスターはグッと上げておいて、強めに弾けば歪むようにセッティングしてやる。これでオーバードライブをオンにすると真空管アンプを歪ませたニュアンスに近いサウンドが出せるんだ。また、足元のコンパクト・エフェクターだけでサスティーンのかかったディストーションにしたいんなら、Bchよりも、歪みのまったくないAchを使った方がいい。それぞれのチャンネルがハッキリした個性を持っているから、使い分けは大事だね。もちろん、2つのチャンネルをステレオで使って、ステレオ系のエフェクターを通した音が1台のアンプで鳴らせるってのもデカイよね。けっこう今は、コンパクト系のエフェクターでもコーラスなんかには、ステレオ・アウトが付いているじゃない。VRのステレオタイプなら、1台でそれが生かせるんだ。あと、VR-5000、6000に付いているデュアルタイプのパラメトリックEQ、これなら、片方で"歪んでいるけどヌケてくる音"の芯になる1.2kHzあたりを持ち上げて、もう一方でライブ会場に合わせた補正をするなんてことも簡単にできるよね。

SOUND MAKE-UP INFORMATION

SDS SERIES

SDSシリーズには、歪みモノ(ディストーション&オーバードライブ)が5機種も含まれている。特にビギナーはチョイスに悩むところだと思うので簡単にアドバイスしておこう。DM-100を除く4機種のキャラクターは大きく図のように分けて考えると良いだろう。下の2つ、DI-100とOD-100は"ソフト"とは言っても従来のデバイスと同等かそれ以上の歪みをクリエイト。しかも歪みのキメはより細かくサスティーンもより長い。上の2つMBD-100とCOD-100は、従来のデバイスよりグンと"ハード"な歪み。しかもキメ細かくサスティーンも長い。特にMBD-100はこれまでに無いローからハイまでの歪みをクリエイトするディストーションのニュージェネレイションだ。どの機種も強力に個性的なので個性に圧倒されないように、自分の欲しいのはどんな音なのか明確に頭に浮かべ、図を頭に入れた上で実際に試してみてほしい。なおDM-100は5機種の中で最もストレートな歪みだが、ディストーションと同時に、あるいは単独に、ダブリング/コーラス/フランジャーの効果もかけられるという、2in1のデバイス。エフェクトのかかりはベストポジションがプリセットされているから手軽にプロフェッショナルなマルチエフェクトを味わえる。コンプレッショングラフィックイコライザーGC-100と組合わせれば、たった2台で4～5台分ものエフェクターとして機能するのもオイシイところだ。

では、SDSの中から数機種をセレクトし、音創りの実際を話しておこう。最も典型的な接続例は図2のような感じだ。MBD-100は他機種の歪モノでもOK。エフェクターはある程度接続順を守らないと効果を充分に発揮してくれない。基本的には図2のように"コンプ→ディストーション→コーラスやディレイ"という線を守れば問題はない。DDよりCHが後にあるのは、CHのステレオアウトを活かすため。モノラルで使用するならこの逆でもOKだ。次は、この他のエフェクターについて説明しよう。

● PH-100、FL-100→ⒷorⒸに接続(Insert)

これらはコーラスやディレイと同様、ディストーションの後につなぐのが普通。ただし、PH、FL、CH、シングルショートディレイにセットしたDDをⒶの位置につないでもクセの強い面白いディストーションサウンドが出せる。

● GE-100→Ⓐ～Ⓒに接続(Insert)

イコライザーは使い途によって接続位置が変わる。Ⓐの位置なら、ディストーションON時には歪む前の音色創り、つまりギター自体の音色創りの役目になる。ⒷやⒸにつないだ場合は歪んだ後の音色創り、つまりアンプの音色補正の役目になっている。もちろん両方につないでより自由に音創りをはかってもヨイ。なおGC-100はCOの代わりに接続すればOKだ。

● NR-100→Ⓓに接続(Insert)

ノイズリダクションはエフェクター群の一番最後につなぐのがベスト。NR-100ならステレオイン/アウトだからCHの後でOKだ。

● Volume Pedal→Ⓐ～Ⓓ

ボリュームペダルの位置も用途によって違ってくる。Ⓐにおけば、ペダルでディストーションのかかりの深さをコントロールできる。Ⓑにおけばディストーションがフルにかかったまま音量のみをコントロールし、ペダルを絞ってもDDのリピートディレイはナチュラルに残る。Ⓒ、ⒹでもⒷと同様だが、ペダルを絞ればディレイ音も同時に消えてしまう。一般的には、Ⓑに接続するのが普通だ。

SDSの接続の要領は以上のような感じだが、音ヤセしないナチュラルなサウンドが身上なので、アブノーマルな接続でも色々な効果が期待できる。色々試して自分だけのサウンドを創出してほしい。

図1

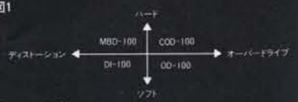
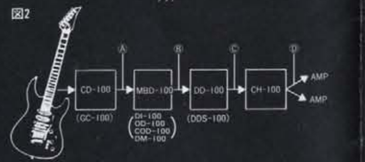


図2



VR STEREO MODEL

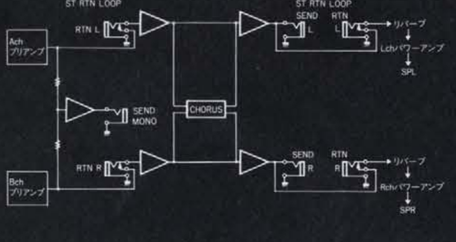
VR-6000、4000は、フロントパネル側のコントロール類も多く、それだけでも充分VRステレオサウンドをクリエイトできるが、リアパネルに配備されたデュアルエフェクトループを使いこなせば、VRは更に発展していく。ちょっとややこしいが図3を見てもらおう。これがVRのエフェクトループの仕掛けだ。内蔵コーラスの前にⒶモノラルセンド/ステレオリターンが、後にはⒷステレオセンド/ステレオリターンが用意されている。SDSシリーズの中からステレオ仕様のエフェクトを選んで接続するとすれば、CH-100とNR-100を、図4のようにⒶにCH、ⒷにNRをつなぐか、ⒷにCHとNRをつなげば良い。NRはなるべく後にあった方が効果的だからⒷがベスト。VRのプリアンプでオーバードライブさせた時に気になるギターのノイズや、内蔵コーラスやCHのわずかなシュワッというコーラスノイズも完全にシャットアウト出来る。リバーブの前なので、リリースは更にナチュラルに響いてくれる。

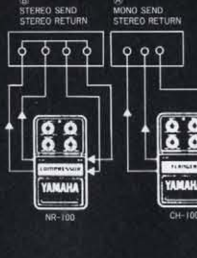
デジタルマルチエフェクトなら、ⒶにREX-50やSPX900ⒷにSPX1000が接続可能。この辺のデバイスを積極的に導入すればVRは正に本領発揮。一台のアンプでここまでパーフェクトに対応しているのは他に類を見ないはずだ。

なお、ステレオ仕様のエフェクトなんか持ってない、という人も問題はない。図3をじっくり見てもらえばわかると思うが、モノラルのエフェクターでも、Ⓐに接続して、LかRの一方のリターンにだけ戻せばOK。

完全に理解するには時間がかかるかも知れないが、このデュアルエフェクトループを把握すれば、VR-6000、4000の凄さが訳るはずだ。

図3



図4